北米における日本美術研究と図書館：現況と課題

Japanese Art Scholarship and Libraries in North America: Current Status and Problems

吉村　玲子*

フリーア美術館は，ミシガン州デトロイト出身の大富豪，チャールズ・ラング・フリーア（1854-1919）が米国立スミソニアン協会に，自分が収集したアジア美術コレクションを寄付し，1923 年に開館した。彼は鉄道会社の経営で財を成し，若くして引退した後，残りの人生を美術品収集に捧げた。ジャポニスムの画家であった親友のジェイムス・マクニール・ホイッスラー（1834-1903）の影響で日本美術を集め始め，1895 年から 1911 年にかけて 4 回日本を訪れている。彼が同時代の他の美術コレクターと違っていたところは，美術品の選定を美術商任せにしなかったことである。さまざまな研究書を読み込み，著名な美術収集家や学者，美術鑑定家などからも貪欲に学んでいった。彼の日本美術収集活動に多いに貢献したのは，ボストン美術館の日本美術コレクションの基を築いたアーネスト・フェノロサ（1853-1908），また，日本を訪れた時に懇意になった三渓園で有名な原富太郎（1868-1935），横浜に古美術商サムライ商会を開業していた野村洋三（1870-1965），そしてニューヨークの山中定次郎（1866-1936）やボストンの松木文恭（1867-1940）らの美術商たちである。良い人脈に恵まれたことの他にフリーアにとってラッキーであったのは，彼が収集活動をしていた時期が，ちょうど明治の初期，日本美術品が大量に流出した時期であったことである。そのお陰で，現在フリーア美術館には，今では日本国外には出ないであろうと思われる作品がたくさんある。代表的な作品例としては，俵屋宗達の「松島図」，喜多川歌麿の「品川の月」などである。日本美術史の大家，矢代幸雄は著書「日本美術の恩人たち」の中で，「… ボストン美術館を除けば，ワシントンのフリーア画廊が，外国に在る日本のコレクションとしては最大であり，また最も高級であって，これを創立したチャールズ・フリーアは … 日本美術の最も感謝するべき恩人として，我々によって記憶されなければならない。」と語っている。[1]

スミソニアンのもうひとつのアジア美術館，アーサー・M・サックラー・ギャラリーは 1987 年に開館し，同じアジア美術館ということで，フリーア美術館と共に一管理下で運営されている。サックラー・ギャラリーの日本美術コレクションは，役者絵版画を中心に江戸・明治時代の浮世絵版画，約 350 枚（アン・ヴァン・ビーマ・コレクション），小林清親や川瀬巴水などによる新版画を中心に明治末期・大正時代の木版画を約 4,500 枚（ロバート・O・ムラー・コレクション）を所蔵している。サックラー・ギャラリーでは，収蔵品の展示や巡回展に関する制限がないので，フリーア美術館では行えない，他の美術館収蔵品を迎えての展覧会，巡回展も積極的に行っている。[2] また，定期的にアジアの現代美術家の展覧会も開催している。現在フリーアとサックラーを合わせて 11,000 点の日本美術品を所蔵している。

図書館も 1923 年，フリーア美術館設立と同時に開館した。図書館のコレクションの基になったのは，美術品と一緒に寄贈された 4,000 点から成る書籍，雑誌などのフリーア自身のプライベート・ライブラリーだった。フリーアは自分の美術品寄贈の際に，自分のコレクションを「新しい美術館の目的はアメリカ国民にアジアの文化を紹介して正しい理解を促す」という条件を付け，図書館は，開館当時から美術館内外の研究活動をサポートしながら，一般市民がアポイントメント無

* よしむら　れいこ（米国スミソニアン協会フリーア美術館図書館主任司書, Yoshimura Reiko, Head Librarian, Freer Gallery of Art・Arthur M. Sackler Gallery Library, Smithsonian Institution Libraries）

1 矢代幸雄. 日本美術の恩人たち（文藝春秋新社, 1961）: p. 28.

2 チャールズ・フリーアは寄贈当時にスミソニアンに対して，フリーアの美術品は館外では展示しない，他の美術館の美術品は館内では展示しないという条件を出している。

しで気軽に訪れることの出来る公共図書館として現在に至っている。館外からの主な利用者は国内外の美術研究者，ワシントン近郊の大学でアジア美術のクラスを取っている大学生・大学院生，そしてアジア美術に興味を持つ一般市民などさまざまである。

勤務している司書の数は主任司書を含む 4 人で，日本，中国，東アジア以外のアジアなど，地域別に担当が分かれており，それぞれが自分の分野の選書，収書，カタロギングを行っている。現在の蔵書数は約 90,000 冊でその約半数は中国語・日本語の資料である。アジア原語資料の収集は，多くのアジア美術研究者が欧米語の資料に頼っていた時代から行われている。図書館の蔵書コレクションの内容は，フリーア美術館コレクションの伝統を踏襲していたことから，開館当時から前近代の中国，日本の絵画，版画，工芸研究資料が充実している。1987 年にアーサー・M・サックラー・ギャラリーが開館して以来，図書館は両美術館の研究活動をサポートすることになり，現代美術に関する資料も集めるようになった。

また，図書館の貴重書コレクションには，フリーアが収集した江戸・明治期の版本が絵本を中心に 600 冊ある。それに加え，美術館でも 2007 年に類似した絵本コレクションを 1,000 冊購入し，美術館・図書館が共催で江戸時時代の絵本講座などを定期的に開いている。

北米の日本美術研究事情と課題

日本からの情報の入手および情報交換

今回，主な日本の美術研究機関を訪問する機会を与えられ，各機関で立ち上げている数々の素晴らしいプロジェクトを拝見させていただいた。その中にはよく知っているものもあったが，　全く知らなかったもの，また聞いたことがある程度ものが殆どで，十分な情報がこちらに伝わっていないように思われる。知っていた，聞いたことのあったプロジェクトについては，北米のアジア研究ネットワークのメンバーらが「日本でこういうデータベースができている」と言ったようなニュースとして発表されていたものである。そのアジア研究ネットワークというのは，例えば，「JAPAN ART HISTORY FORUM」とか，「北米日本研究図書館調整委員会，英語名 North American Coordinating Council on Japanese Library Resources，略称 NCC」，「北米東アジア図書館協議会，英語名 COUNCIL ON EAST ASIAN LIBRARIES，略称 CEAL」などである。これらのグループはリストサーブや，ウェブサイトなどに，アジアまたは日本研究に関するあらゆる情報を流して，研究者や図書館司書たちの活動をサポートしている。日本の美術館・美術図書館関係の方々に，是非北米の日本研究ネットワークに参加して新しいプロジェクトに関する情報や進行状況などを積極的に紹介いただければ，今回見せていただいた多くのプロジェクトの情報が北米の研究者や図書館に満遍なく伝わり，北米からの利用者が増えて行くと思われる。

北米研究図書館での日本美術部門の状況

北米では日本美術作品の大きなコレクションを所蔵する美術館であっても，日本人もしくは日本語のできる司書を備えているところは少なく，大抵ひとりの司書が，中国・日本・韓国語資料コレクションを管理している。これは美術図書館だけではなく，少数の総合大学を除いた多くの大学図書館でも同じ状況で，殆どのアジア部門司書は，中国語，日本語，韓国語いずれかの一言語ができ，自分ができない言語の資料は，学芸員や教授，また美術専門の書籍売者に選書の手助けを依頼している。さらに，アシスタントやボランティアを使ったり，他の図書館のアジア部門司書と協力して，資料収集とカタロギングに臨んでいる。地理的に近い二つの大学が日本部門の司書と日本関係コレクションを共有しているところもある。ひとりの司書がアジア全般を担当しなければならないという状況は，深刻な問題となっており，毎年削減される予算からしても，将来改善されることはないと思われる。さらに，日本美術分野に限って言えば，　北米の美術館図書館のアジア部門を担当している多くの司書は中国人である。従って，日本語のできない日本美術担当司書の人達をどのようにして援助し，教育して行くかが，これからの北米のアジア研究図書館にとって課題になると思われる。今回のようなワークショップを英語で行うことが出来たら，より多くの北米の日本美術担当司書が参加でき，恩恵を受けることが

できると思う。国会図書館では司書のためのオンライントレーニングをやっておられるようだが，同じような設定で海外日本美術研究図書館司書のためのトレーニング・プログラムを企画することは可能であろうか。また，日本語の司書を援助するという意味で，日本の図書館のサイトに，プロジェクトの紹介など，英語による情報を出来るだけ入れていただきたいと思う。

画像の入手に関する諸問題

画像の入手・利用は，インターネットが普及してデジタル化した画像を世界のどこにでも瞬時に送れる時代になり，ポジフィルムを作って郵送していた時代に比べると目を見張るほど簡単になった。が，実際には，画像版権や版権所有者の確認など煩雑な処理が伴い，画像を入手して利用可能にする作業は，研究者，特に美術研究者，出版関係者にとっては依然として頭痛の種になっている。さらに，デジタル画像は複製してメールやウェブサイトで簡単に公表できるので，そのことが，出所のわからない画像を生み出す原因となったり，複製した画像に編集を加えたものが氾濫し，画像版権所有者の確定は殆ど不可能な状況が起こっている。

北米では，日本からの画像入手のための手助けとして，NCC，北米日本研究図書館調整委員会は IMAGE USE PROTOCOL というサイトを作り，日本から画像を入手するための役に立つ情報，画像利用許可願いの雛形，最新コピーライト情報などを提供している。2008 年には東京で，日本の画像資料関係者を招いて情報交換のためのシンポジウムも開いている。[3]

それにもかかわらず，北米の研究者の間では日本からの画像入手に関して次のようなコメントが出ている。それらは，「英語でリクエストすると時間がかかる，返事が来ない」「美術館のウェブサイトに行っても，画像入手情報が見つからない」「『誰』に連絡を取ればいいのか」「クレジット・カードを使って支払いができない」などである。今回のワークショップでは DNP アートコミュニケーションズをはじめ，各美術館の画像データベースを見せていただき，「画像を見つける」ためのツールがかなり充実していることがわかり嬉しく思った。これらの画像が，海外の研究者にとって利用可能であるのかどうかが容易に判り，また，利用可能である場合，ある程度同一のプロセスでどの美術館からも画像が入手できるようになると，状況はかなり改善できると思う。一方，各々の美術館が同じプロセスで所蔵品の画像を提供していくのは不可能かも知れない。が，少なくとも，画像入手に関する問い合わせ先，メールアドレスなどを美術館のサイトの判りやすいところに明記していただきたい。また，日本独自の習慣に慣れていなかったり，日本に伝のない研究者のための，英語による「日本画像利用相談」のサイトなどが有ると理想的である。

日本美術研究書の翻訳について

北米の大学院博士号課程で日本美術史を専攻する学生は，日本語読解力を必須とされ，その結果，現在活躍している日本美術研究者の殆どは，日本語資料を読むことができる。しかし，学部の段階では日本語を読みこなせる学生は少なく，特に一般教養で日本美術を勉強する学生はどうしても英語の文献に頼らねばならない。例えば，ワシントン周辺の大学のアジア美術サーベイ・コースの学生が，フリーア美術館の作品について論文を書くために図書館を訪れるが，1970 年から 1980 年にかけて英語に翻訳された次のふたつの日本美術史研究書が今でも使われている。ひとつは「Japanese Arts Library」で，至文堂発行の月刊誌「日本の美術」中から 15 冊を選んで翻訳したものである。[4] もう一点は平凡社発行の「Heibonsha Survey of Japanese Art」30 巻[5]では，1964 年から 69 年に平凡社から出版されたシリーズ「日本の美術」を翻訳したものである。どちらの翻訳もアメリカの日本美術史学の大家，ジョン・ローゼンフィールド博士が中心になって企画・監修した。が，それ以来，特名すべき翻訳研究書は出ていないようである。日本美術史に関する日本語研究資料を翻訳して提供していくということは，欧米における，将来の研究者を育て

3 http://guides.nccjapan.org/imageuse.
4 Japanese Arts Library (Kodansha International/Shibundō, 1977-1987) 15 volumes.
5 Heibonsha Survey of Japanese Art (Heibonsha/Weatherhill, 1972-1980) 30 volumes ＋Index.

るためにはたいへん重要であり，そして熟練の研究者の情報交換の一助にもなると思う。逆に欧米語でかかれたものを日本語に翻訳することによって，欧米での研究結果を日本の美術史研究者に幅広く紹介することは，これからの日本美術研究の発展のために有意義であるのではないか。日本と欧米が協力して，日本語の美術研究書を欧米語に，欧米語の研究書を日本語に翻訳するプロジェクトができれば理想的であると思う。

以上，現在北米の日本美術研究者および図書館の抱えている問題，そして課題について簡単に述べてみた。勿論，これら全ての問題を日本の方に解決していただこうという訳ではなく，米国の現場にいる私たちが何とかしていかなければならない問題であると思う。ただ，今回のワークショップを機に，日本と欧米の情報交換が進み，将来少しずつでも問題改善に繋げていけたらと思う。そのためには，海外の現場で日本美術研究をサポートする私たちがリーダーシップを取って行かなければならないと強く感じている。

最後に。今回のワークショップではたくさんの美術館を訪れることができ，貴重な体験をさせていただいた。ひとつ残念であったことは，各訪問先で十分な時間がなく，司書の方々と直接の交流ができなかったことである。将来またこのような機会を持つことが出来たら，欧米と日本の司書間の個人レベルでの情報交換の場を持つことができることを切に望む。

1

日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言

北米における日本美術研究と図書館: 現況と課題

Japanese Art Scholarship and Libraries in North America:
Current Status and Problems

吉村玲子
米国スミソニアン協会フリーア美術館
図書館主任司書

2

フリーア美術館

3

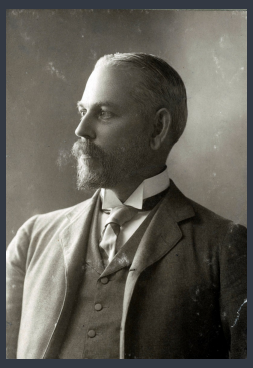
チャールズ・ラング・フリーア（1854–1919）（1916年頃）

4

ジェイムス・マクニール・ホイッスラー（1834–1903）と「孔雀の間」

5

アーネスト・フランシスコ・フェノロサ (1853 –1908)



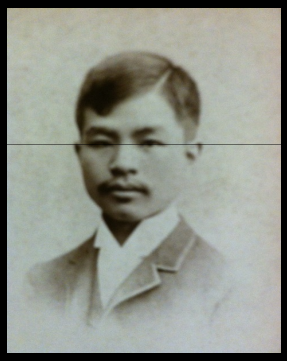
6

野村洋三 (1870-1965)

原富太郎(三渓) (1868-1935)

7

松木文恭 (1867-1940)



山中定次郎

8

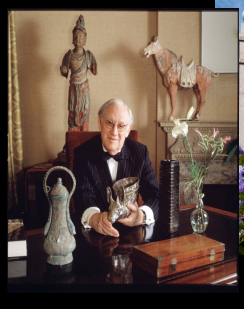
俵屋宗達「松島図」

9

喜多川歌麿「品川の月」
三部作「雪月花」の一部

10

アーサー・M・サックラー・ギャラリー



11

アン・ヴァン・ビーマ浮世絵版画コレクション

(左)
月岡芳年
「芳涼閣両雄動」

(右)
月岡芳年「月百態」

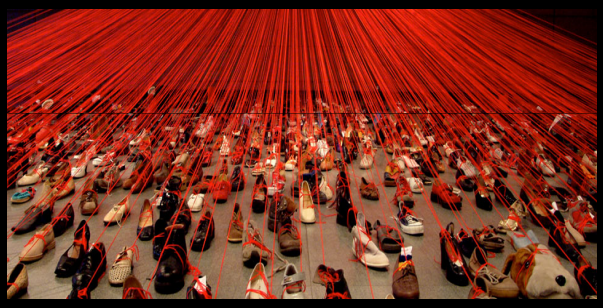
12

ロバート・O・ムラー 新版画コレクション

川瀬巴水「月の松島」

13

塩田千春 「Perspectives」



14

フリーア美術館図書館　１９６０年代

15

フリーア美術館図書館（現在）

16

江戸時代絵本コレクション

17

北米における日本美術研究と図書館：現況と課題

1．日本からの情報の入手および情報交換

2．北米研究図書館での日本美術部門の状況

3．画像の入手に関する諸問題

4．日本美術資料の翻訳

18

日本からの情報の入手および情報交換

<u>北米日本研究者間のネットワーキング</u>

a. 日本美術史フォーラム = Japan Art History Forum

b. 北米東アジア協議会 = Council on East Asian Libraries

c. 北米日本研究図書館調整委員会 = North American Coordinating Council on Japanese Library Resources

19

北米研究図書館の日本美術部門の状況

＊日本語のできる司書を備えているところは少ない。

＊ひとりの司書が、中国・日本・韓国語資料コレクションを管理。

　ー　学芸員や教授、美術専門の書籍販売者、アシスタントやボランティアの助けを借りて仕事をしている。

　ー　他の研究図書館司書と協力して業務している。

＊日本語の出来ない司書のためのトレーニング、サポートが必要。

＊日本の図書館のサイトにできるだけ英語による情報を入れて欲しい。

20

画像の入手

＊英語でリクエストすると時間がかかる / 返事がない。

＊美術館のウェブサイトに行っても、画像入手情報が見つからない 。担当部/担当者が明記されていない。

＊クレジット・カードを使って支払いができない。

＊日本からの画像入手の手続きが画一化していることが望ましい。

＊「画像入手のための相談室」のようなサイトがあると便利。

21

Japanese Arts Library

(Kodansha International/Shibundō, 1977-1987) １５巻

-- 日本の美術（至文堂）から１５冊を翻訳

22

Heibonsha Survey of Japanese Art

(Heibonsha/Weatherhill,1972-1980) ３０巻＋Index

-- 日本の美術 [シリーズ] （平凡社）1964-1969 を翻訳

23

日本美術資料の翻訳プロジェクト

将来の研究者を育てるため、研究者の情報交換のための翻訳プロジェクトの提案

～　事典などの基礎参考資料 （日本語→英語）

～　研究書（日本語←→英語）

24

ま　と　め

1. 日本からの新情報を定期的に入手するためのルートを確立する。

2. 出来るだけたくさんの情報を英語（欧米語）で入手したい。

3. 日本語のできない司書たちのためのトレーニング、サポートが必要。

4. 日本からの画像入手プロセスを出来るだけ画一化して欲しい。

5. 日本と欧米の日本美術研究資料の翻訳を推進する。